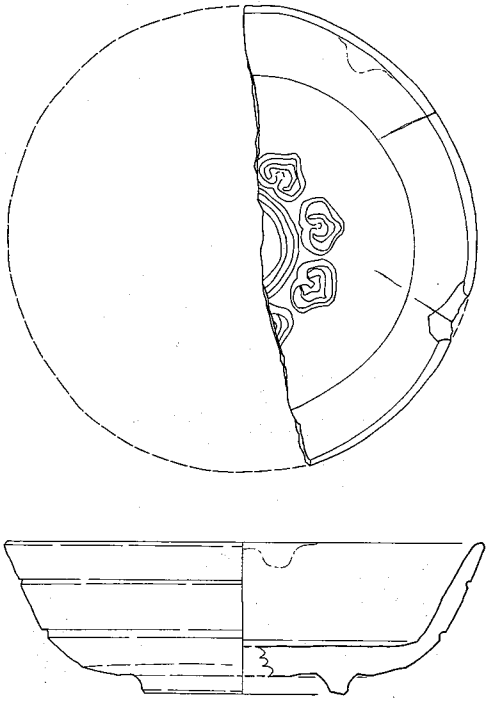
池田井田遺跡

－ 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 －

前原市波多江駅南一丁目所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第91集



2006

前原市教育委員会

1．池田井田遺跡全体図（真上から）

2．出土遺物（高麗青磁）

序

前原市は、朝鮮半島や中国大陸に近い地の利を活かし、弥生時代に『魏志』倭人伝にも記されている「伊都国」の地として繁栄した地です。市内にはその繁栄を示す数多くの遺跡が存在しています。

池田井田遺跡の位置する地域は、江戸時代に干拓が行われるまで比較的海に近く、周辺には大規模な弥生時代の玉作り工房が発見された潤地頭給遺跡や、小銅鐸や楽浪系遺物など朝鮮半島とのつながりを示す遺物が出土した浦志Ｂ遺跡、浦志井尻遺跡などが分布（所在）する、市内でも重要な地域にあたるとともに、条里の遺構や中近世の街並み、館跡なども残る歴史遺産豊かな地域として知られ、今回の調査でもその一端を垣間見ることができました。

本書が当該地区の研究の一助となり，文化財の保護になれば幸いです。

平成18年３月31日

前原市教育委員会
教育長　菊　竹　利　嗣

例　言

1．本書は、福岡県前原市波多江駅南一丁目707-8、10番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は、集合住宅建設に伴い平成17年9月から11月にかけて行った緊急発掘調査である。なお、平成17年10月11日住居表示が変わり、調査地点住所が「大字池田字井田」から「波多江駅南一丁目」に変更したが、遺跡名には旧表示を用いる。

2．本書に使用した1/1,500、1/50,000地形図は前原市都市計画図（平成10年度作成）を使用した。

3．本書に使用した遺構実測図、および写真撮影については脇谷華代子が行い、遺物の写真撮影については楢崎直子が行った。また、発掘現場の空中写真については、（有）空中写真企画(代表　檀睦夫)　に委託した。

4．遺物実測は脇谷が行い、遺構図・遺物図の製図は友池真由美が行った。

5．本書の執筆分担はまとめを瓜生秀文、他を脇谷が行い、編集は脇谷が行った。

6．本書で報告した遺構図、遺物図、記録写真、出土遺物は、一括して伊都国歴史博物館で保管・管理する予定である。

7．本遺跡の調査に、ならびに報告書作成にあたり以下の方から御指導、御助言をいただいた。
記して感謝いたします。
西谷正、堀本一繁、松井和幸、丸山雍成　(五十音順)

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
（1）調査に至る経過……1
（2）調査の組織……1

Ⅱ．位置と環境……2

Ⅲ．調査の記録……4
（1）調査の概要……4
（2）溝……7
（3）掘立柱建物……10
（4）柵列状遺構……11
（5）その他の遺構……11

Ⅳ．まとめ……15

挿図目次

第1図　池田井田遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000)……3
第2図　調査地点位置図（1/1,500）……4
第3図　池田井田遺跡遺構配置図（1/100）……5
第4図　1号溝(南北方向)実測図（1/80）……7
第5図　1号溝(東西方向)実測図（1/80）……8
第6図　1号溝土層断面図（1/60）……9
第7図　1号溝出土遺物実測図（1/3）……9
第8図　1号掘立柱建物実測図（1/60）……10
第9図　柵列状遺構実測図（1/60）……11
第10図　柱材が残る柱穴実測図(1/20)……12
第11図　柱穴実測図（1/20）……13
第12図　柱穴出土遺物実測図（1/3）……14

図版目次

巻頭図版
巻頭カラー　1．池田井田遺跡全体図（真上から）
2．高麗青磁碗

図版
図版1　1．池田井田遺跡から産宮神社をのぞむ(南西から)
2．池田井田遺跡(真上から)
図版2　1．1号溝(南北方向、南から)
2．1号溝(東西方向、東から)
図版3　1．南北方向1号溝土層断面（南壁面）
2．東西方向1号溝土層断面（東壁面）
図版4　1．1号掘立柱建物(南から)
2．柵列状遺構(真上から)
図版5　1．45号柱穴高麗青磁碗出土状況(南から)
2．44号柱穴土師皿出土状況(東から)
図版6　1．裏込石（77号柱穴）
2．同上（133号柱穴）
3．同上（23号柱穴）
4．同上（203号柱穴）
5．同上（204号柱穴）
6．柱材出土状況(202号柱穴)
図版7　1．高麗青磁碗
2．出土遺物

Ⅰ．はじめに

（1）調査にいたる経過

本調査は、集合住宅建設に伴い行われた発掘調査である。建設計画は、平成17年度8月19日に施主である山崎孫好氏より埋蔵文化財発掘の届出があった。これを受けて8月26日に関係者立会の下試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、8月末に施工主、施工業者と再度協議を行い、本発掘調査を行うこととなった。

調査面積は住宅の基礎が入る450㎡を中心に行った。発掘調査は平成17年9月20日から開始し、約2ヶ月後の11月18日に終了した。調査の結果、15世紀を中心とする環濠居館の一部と推定される堀遺構、掘立柱建物などを確認し、調査終了に際しては11月9日に新聞発表、11月12日には現地説明会を行った。当日は好天にも恵まれ200人近い見学者となった。また、調査終了日には近隣の波多江小学校6年生児童への見学会も行い、文化財の地域への普及、周知化を図ることができた。

（2）調査の組織

本調査における組織構成は以下のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
担　当	教育部・文化課・文化財係	
総　括	教育長	菊竹　利嗣
	教育部長	久我　和彦
	文化課長	鬼木　武信
	文化課長補佐	中村　鉄弥
	文化課文化財係長	岡部　裕俊
庶　務	文化課文化財係主事	中野　幸功
審　査	文化課文化財係主査	瓜生　秀文
調　査	文化課文化財係主事	脇谷　華代子

調査作業員　市丸千賀子、井上狭衣、織田優平、柏田睦子、川上久美子、末松繁光、徳永美根子、平山冨士子、福井菊雄、藤森啓子、中山健介、山崎チヨ子、米山八重子、和多治子

現地説明会のようす

II．位置と環境

池田井田遺跡は旧海岸線に程近い、標高8～9mの低地に位置している。西に瑞梅寺川、東には雷山川が流れ、海へ向かって北側になだらかな勾配をもつ。

遺跡の南東約30mには産宮神社があり、北側約1.2kmには国指定史跡志登支石墓を含む弥生時代から古墳時代、中世にかけての集落遺跡、志登遺跡群が広がっている。ここからは本報告遺跡から出土した同時期の高麗青磁の壺と椀が井戸とピットから出土している。また、この志登遺跡群と雷山川を挟んで西側には、近年の調査で注目された弥生時代終末から古墳時代にかけての大規模な玉作工房跡、潤地頭給遺跡を含む潤遺跡群が存在する。この潤地頭給遺跡からは山陰や瀬戸内、近畿地方など国内各地との交流を示す遺物や、当時の交流にも使用されたと考えられる準構造船など貴重な遺物が多く出土している。潤遺跡群の西側には浦志遺跡群が広がり、楽浪系遺物や小銅鐸などが出土した浦志B遺跡や浦志井尻遺跡が位置している。この地が弥生・古墳時代のみならず中世においても対外交渉の拠点であったことは、当時貴重な品であった高麗青磁が本報告遺跡の他、志登遺跡、上町木下遺跡、潤地頭給遺跡、三雲・井原遺跡（中川屋敷地区）など海岸部に近い遺跡に集中して出土する状況に見て取れる。海岸線に近い立地から、朝鮮半島や大陸との交通の要衝として長い間重要な位置を担っていた地なのである。

中世には、本報告遺跡より南へ約650～700mの所に、室町～戦国時代にかけての堀に区画された掘立柱建物群が確認された波多江遺跡や、現存する中世の武家屋敷、波多江丹波守屋敷が存在している。波多江遺跡では幅3.5mの１条の溝とそれから派生する幅1.8～2.4mの２種類の溝により区画された空間に、柱間2.4m（８尺）の２間×３間の掘立柱建物が重複して３棟検出している。これらの遺構からは、土師皿、瓦質土器、中国製の輸入陶磁器の他、国産の唐津陶器や染付等も出土している。国産の陶磁器が出土していることから、本報告遺跡より新しい時期まで存続していた屋敷遺構である。この波多江遺跡の北側に隣接する武家屋敷、波多江丹波守屋敷は、二重の堀とその間の土塁に囲まれた一辺約50mのほぼ正方形を呈する区画が現存している。外堀は現在田畑の造成で埋もれているが幅４mの内堀は当時の様子を残している。このことから、２遺跡が位置する現在の国道202号バイパス波多江交差点付近は中世の有力氏族波多江氏一族の拠点集落と考えられている。

波多江氏は、中世糸島一帯で勢力を持っていた有力氏族の原田氏の分家であり有力家臣の一族であった。この原田氏は15世紀代に原田氏が大宰大弐の大内氏の傘下に入って勢力を誇るも、16世紀中頃には滅亡する。原田氏関連の遺跡は居館が築かれた高祖の他、市内各地で確認されている。原田種直の墓が所在する八幡宮遺跡の周辺には東五反田遺跡、東遺跡群があり堀に区画された環濠居館跡も確認されている。また、雷山側西岸丘陵部に位置する蔵持遺跡群からも輸入白磁壺等を保有する屋敷跡が調査されており、当時の原田氏一族の様子をうかがい知ることができる。

＜参考文献＞

福岡県教育委員会　1982年　『波多江遺跡』　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集
瓜生秀文編　1993年　『蔵持古屋敷遺跡』　前原市文化財調査報告書第46集
瓜生秀文編　2001年　『蔵持境遺跡』　前原市文化財調査報告書第74集
中西善昌編　2000年　『歴史資料としての戦国期城郭―北部九州における城郭遺構と地域勢力―』
地域資料叢書５

1．池田井田遺跡　2．釜塚古墳　3．一貴山銚子塚古墳　4．八幡宮遺跡（原田種直墓址）　5．東遺跡群　6．東五反遺跡　7．東二塚古墳　8．日明古墳群　9．長獄山１号墳　10．長野宮ノ前遺跡　11．飯原門口遺跡　12．奈良尾遺跡　13．上鑵子遺跡　14．寺浦遺跡　15．篠原新建遺跡　16．上町向原遺跡　17．浦志遺跡群　18．潤神社古墳　19．潤地頭給遺跡（潤遺跡群）　20．志登支石墓　21．志登遺跡群　22．波多江遺跡　23．波多江丹波守屋敷　24．蔵持境遺跡　25．蔵持古屋敷遺跡　26．蔵持遺跡　27．香力天神ノ前１号墳　28．平原遺跡　29．井田御子守支石墓　30．曽根遺跡群　31．三坂七尾遺跡　32．高上石町遺跡　33．屋敷１号墳　34．山北井田１号墳　35．三雲・井原遺跡　36．三雲南小路遺跡　37．端山古墳　38．築山古墳　39．井原鑓溝遺跡　40．泊大塚古墳　41．御道具山古墳　42．津和崎権現古墳

第１図　池田井田遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）

Ⅲ．調査の記録

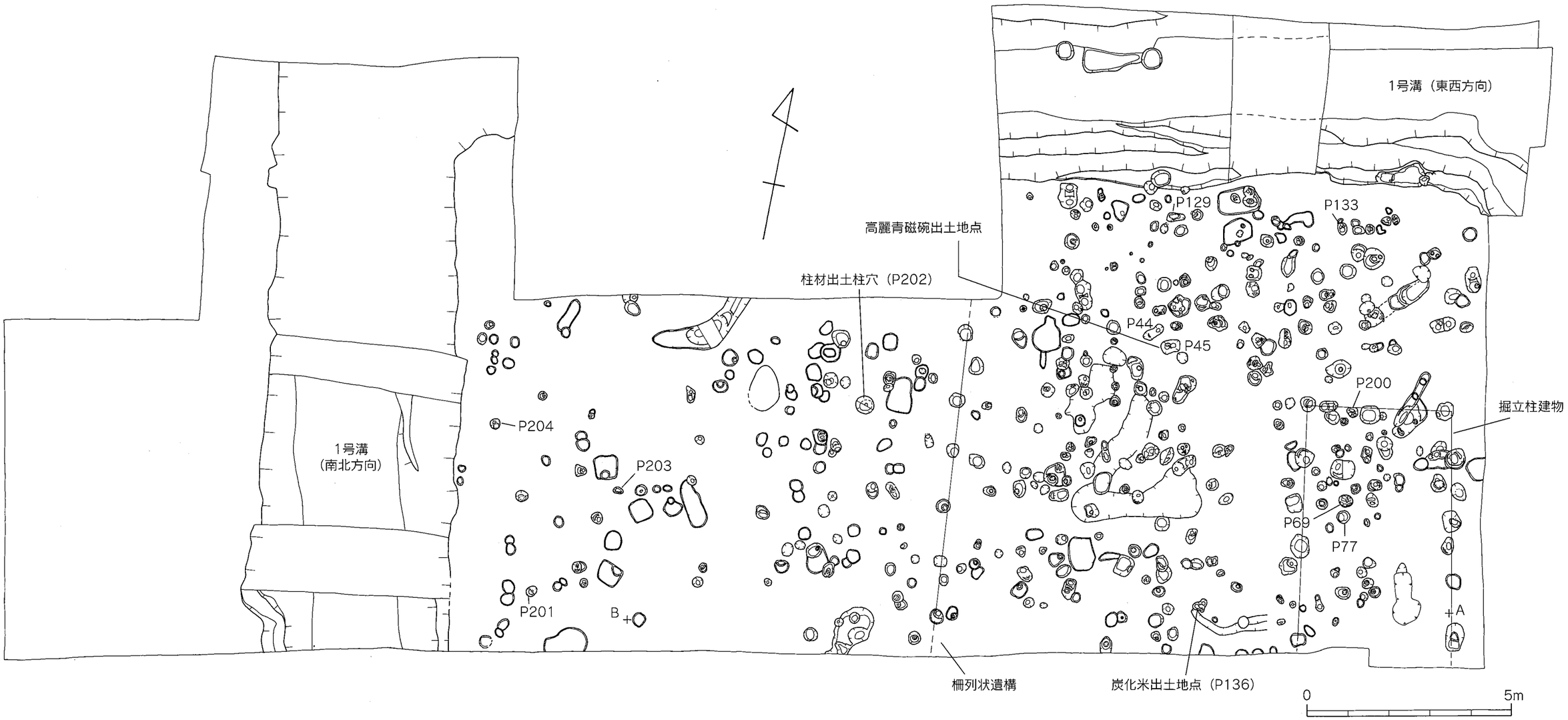
（1） 調査の概要

調査は初め、集合住宅の基礎が入る部分に東西に長いＬ字状にトレンチを設定した。東西方向には当初45mのトレンチを設けたが、西側の南北方向の堀以西は全く遺構が検出されなかったため確認後埋め戻し、東西36mの総面積450㎡の調査を行った。調査の過程で、東西、南北に屈曲する堀状遺構を確認したため、屈曲部分の確認のため途中で一部北側に調査区を拡張している。

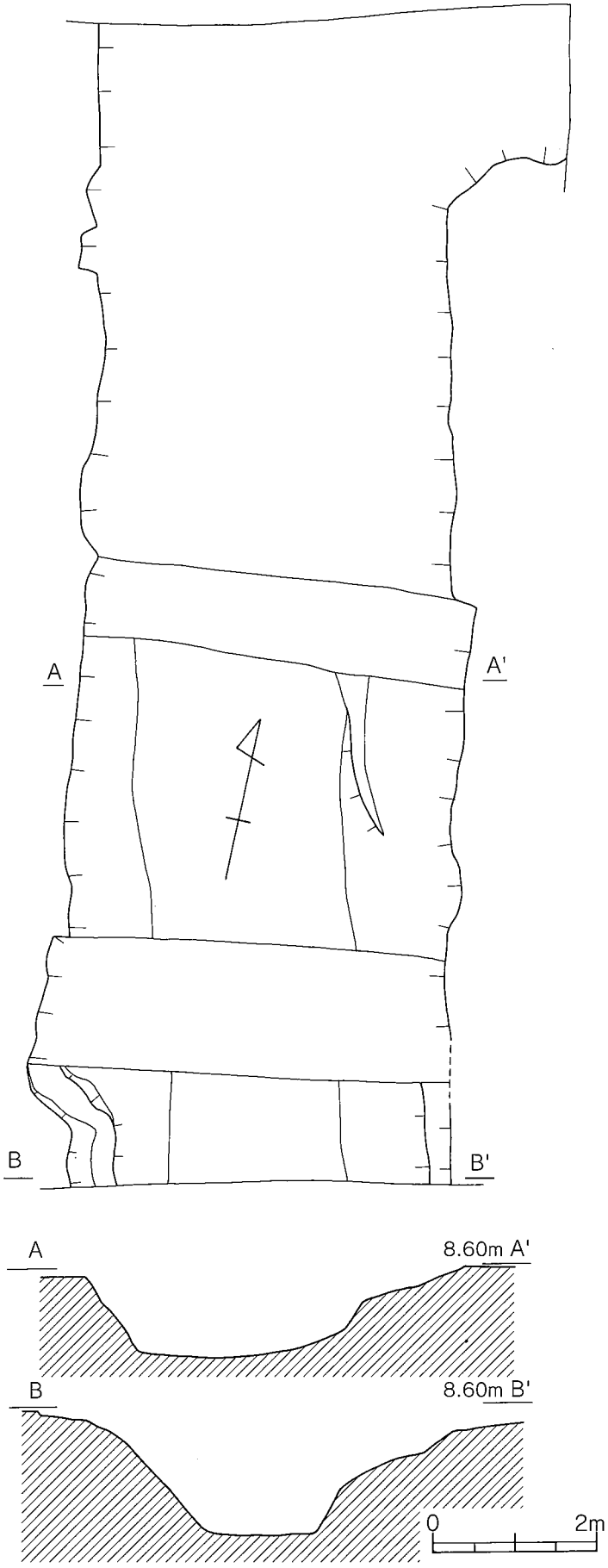
遺構面は原表土から30～40cm下の比較的浅い地点で検出した。赤褐色の粘質土の地山に、暗褐色から灰褐色の遺構埋土であった。また、当調査区は標高が低いことから30cmほど掘り下げると湧水点に達し、遺構に随時水が溜まっている状況であった。そのため柱材、炭化米などの有機質の遺物が残りやすく、比較的多く検出した。

検出した主な遺構は中世（室町～戦国時代）を中心とする遺構で、東西、南北に屈曲する溝１条、掘立柱建物１棟、柵列状遺構１条、柱穴多数である。柱穴の中には低湿地の地盤を考え裏込めの石や礎石を施したものが多く見られ、埋土に炭や焼土を含むものも確認された。遺構の状況から、当調査区は堀によって区画された14～15世紀にかけての環濠居館跡と考えられる。

第２図　調査地点位置図（1/1,500）



第３図　池田井田遺跡遺構配置図（1/100）



第４図　１号溝（南北方向）実測図（1/80）

（２）溝

１号溝（図版１～３、第４・５図）

調査区を囲むように検出した南北、東西方向の一連の溝は全長30mで、幅の分かる南北方向で4.5mを測る。溝は南北から東西方向とほぼ直角に屈曲しており、検出した長さは南北方向で14.5m、東西方向で13.8mである。遺構はすべて掘削したが、南北方向の一部は土層観察のため残し、建物の基礎が入らない北側拡張部分は平面プランの確認のみで遺構の保全を図った。以下、南北方向と東西方向に分けて遺構の説明を行う。

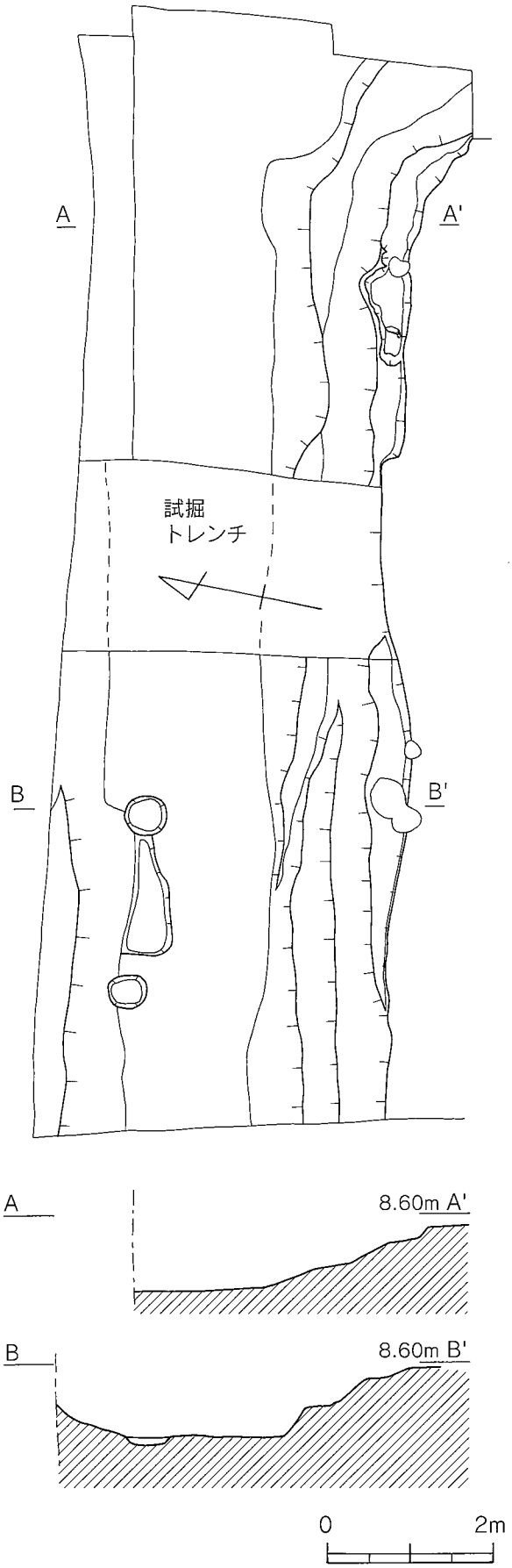
（南北方向）

断面形態は逆台形を呈しており、北側から南側に向かって溝の底面は深くなる。堀方の東側は二段堀になり一部テラスをもつ。深さは北側7.56m、南側7.08mである。

遺構埋土は大きく灰褐色粘質土（第４・７層）と黒灰色粘質土（第８層）の２層に分かれ、出土遺物は上層の灰褐色粘質土層からそのほとんどが出土している。最下層には流木、木の葉など有機質の遺物が重なる粘質土で、現在も湧水していることから掘削当時から常に水を湛えていたものと想定される。

土層断面からは、溝の両サイドには土塁状の遺構は確認できないが、溝に沿って遺構が少なく、遺構の直上に現代耕作土層があり、遺構までの深さも浅いことから、後世の掘削により消滅した可能性も考えられる。

第１～３層からは近現代の陶磁器片が出土している。おそらく現代に入ってから畑の造成が行われるまでこの溝遺構は窪地状に残っていたと想定される。



第５図　１号溝（東西方向）実測図（1/80）

出土遺物は、中国製の輸入陶磁器と高麗青磁片、灯明皿（第７図１，２，４）である。

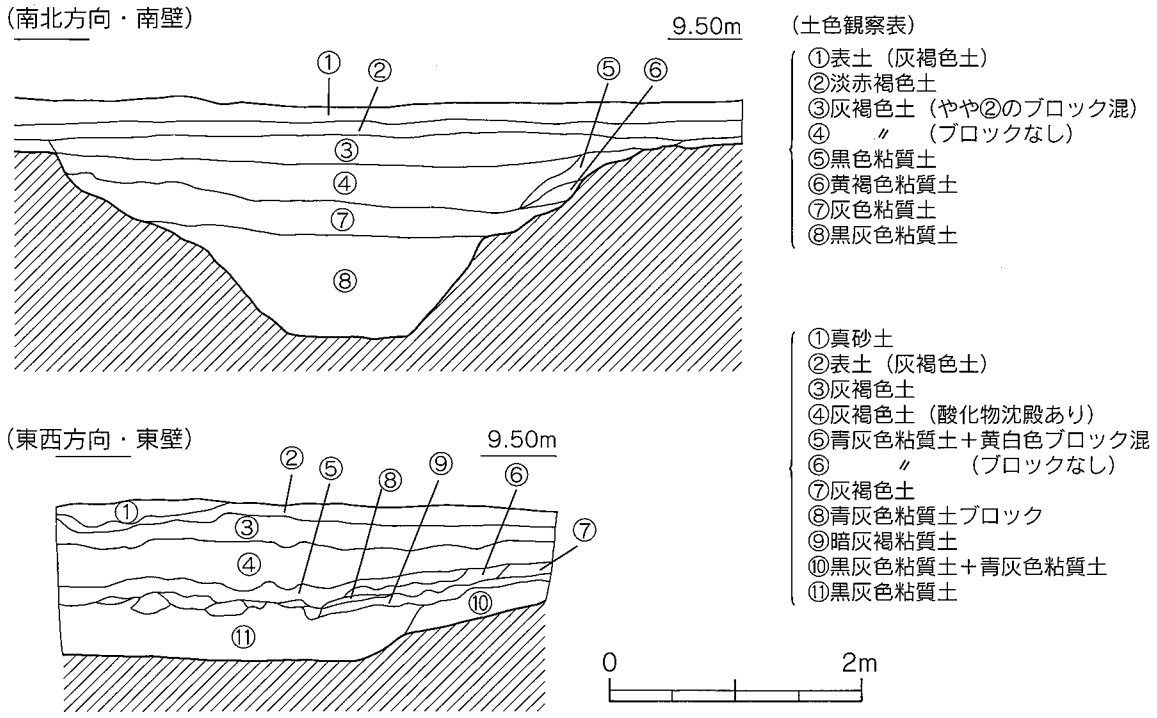
（東西方向）

断面形態は扁平な逆台形を呈している。北側の遺構の方が調査区外で明瞭でないが、西端で底面からの立ち上がりが見られる。底面の幅は1.5mである。幅は不明である。底面のレベルは7.7mで南北方向より浅い。溝の堀方は階段状に段々になっており傾斜は南北方向よりも緩やかである。溝はほぼ東西を向いており、調査区東側端で南側に曲がり産宮神社の方向へと延びる。ここから南北方向の溝までの東西内法は25mであり、屋敷を小区画する溝と考えられ、波多江遺跡などで見られるようなT字の交差部分にあたり、その東側へも屋敷遺構が続くものと考えられる。溝の埋土は、黒灰色粘質土一層で上層は確認されなかった。埋土中は流木、木の葉などの有機物が堆積するなど南北方向と同様である。

出土遺物は第11層から完形の灯明皿１点（第７図－３）と、土師質土器の破片が出土しており、その上層の第１～９層からは近現代の陶磁器、針金等が出土している。最下層の第11層の断面上面に凹凸が見られるのは、常時湧水があり溝が埋まった後も水はけが悪く地面が締まっていなかった状態を示していると思われる。土層の状況から南北方向の溝と同様、現代の水田造成が行われるまでは窪地状に溝の痕跡が残っていたものと考えられる。

溝の西側底面に２カ所柱穴が確認された。柱穴の痕跡はわずかで、深さ8～10cmほどで、約50×40cmの楕円形の柱穴が東西方向に並び、間隔は２m離れている。橋などの遺構の可能性が考えられるが、溝の南側部分に対応する明確な柱穴は見つからなかった。

また、土層断面の観察と溝に近接して柱穴、土坑などが密集度から、溝に伴う土塁が存在

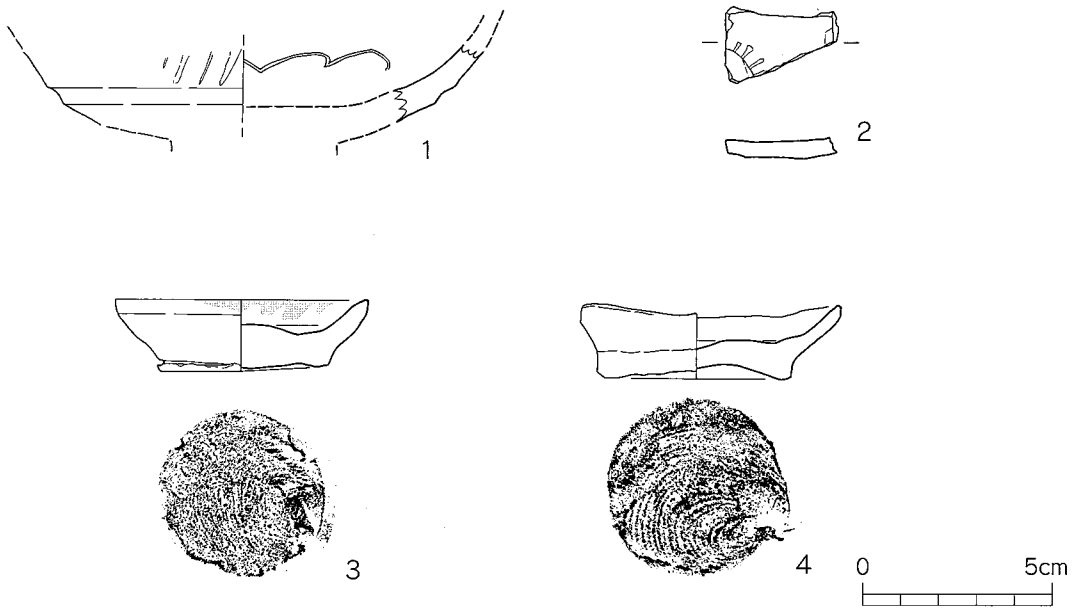


第６図　1号溝土層断面図（1/60）

した可能性は低いと考える。

出土遺物（図版７、第７図）

１は中国輸入陶磁器の青磁碗で、口縁部と高台部分が欠損している。暗緑色の釉で、外面に縦方



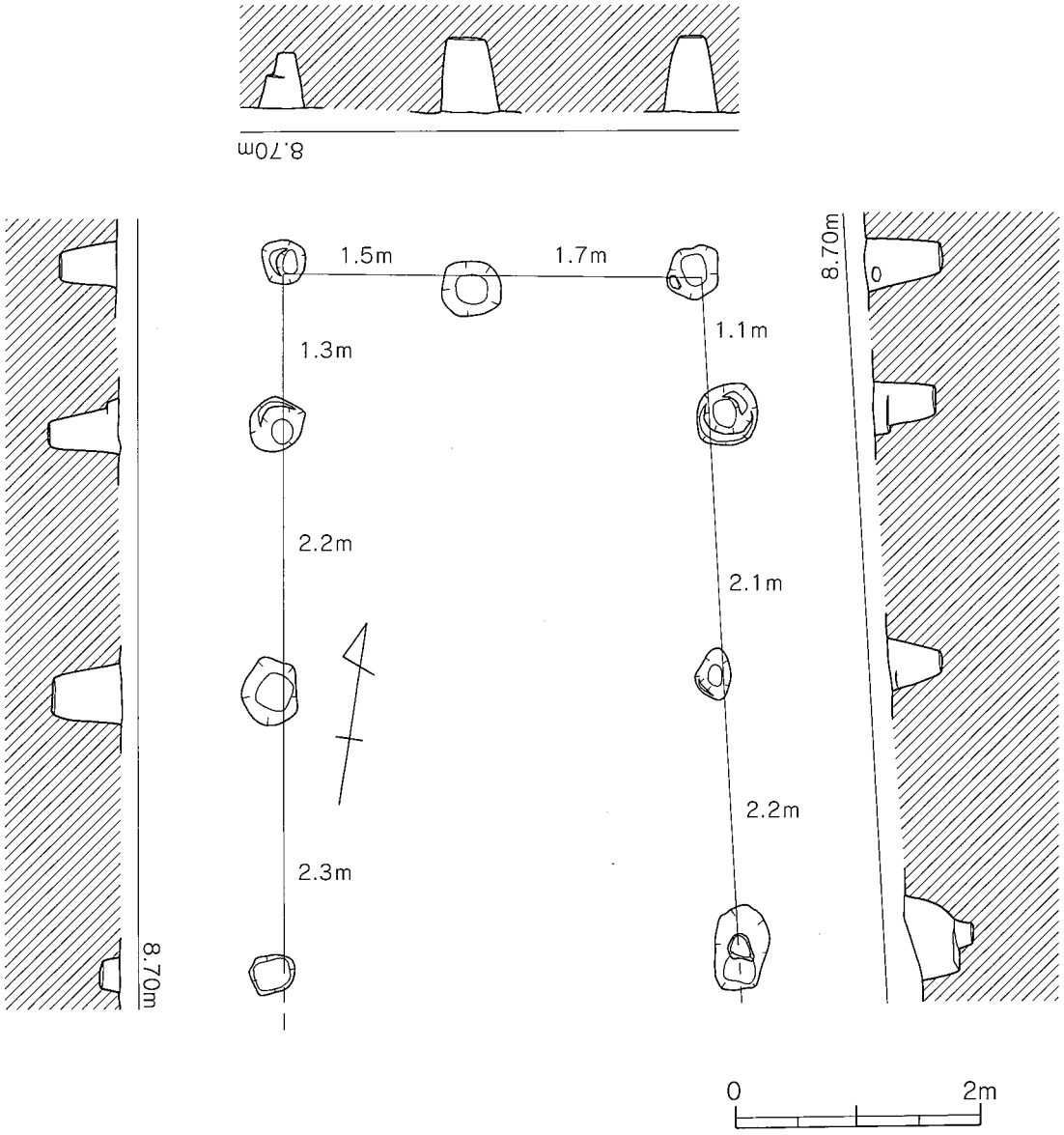
第７図　1号溝出土遺物実測図（1/3）

向の櫛書文がみられる。見込みには花弁状の沈線が施されている。胎土は暗緑色で、氷裂はみられない。２は、高麗青磁片で碗の一部と思われる。暗灰褐色の釉に、見込み部分には白象嵌文様が見られる。胎土は暗灰色で、氷裂はない。３は、完形の灯明皿である。口径6.6cm、器高1.9cm、底径4.4cm。底部は左回りの回転糸切りである。口縁部にはタール状になったススが付着する。胎土はやや粗く、雲母、長石を含む細かい胎土である。４も３と同形だが、ススの付着は見られない。全体的に歪な器形で口縁の一部が欠損する。復元口径6.7cm、器高1.6～1.9cm、底径5.0cm。底部は回転糸切りである。溝の時期は高麗青磁などから14～15世紀代にあたる。

（３）掘立柱建物

１号掘立柱建物（図版４、第８図）

調査区南東部端で検出した２間×３間の掘立柱建物で、現況で3.2m×5.3mを測りさらに調査区の南へ延びる可能性がある。建物の主軸はほぼ南北に沿っており、１号溝や柵列状遺構とも軸が揃っている。柱穴の深さは底面レベルが8.0mで、埋土には焼土、炭が混入していた。



第８図　１号掘立柱建物実測図（1/60）

遺構は調査区東部～南部に集中しているため、その他の建物等の中心は調査区東部に広がるものと考えられる。出土遺物は図化できるものはなかったが、糸切り底の土師質土器片が出土しており遺構の時期は１号溝と同時期に捉えられる。

（4）柵列状遺構

１号柵列状遺構（図版４、第９図）

１号溝の南北方向にほぼ平行して並ぶピット列である。それぞれのピットの間隔は等間隔ではなく、深さは40～50cm、堀方は円形である。ピット内は常時湧水しており埋土の中には乾燥を目的としたものか、炭や焼土が多く混入している。この柵列状遺構を挟んで西側と東側では遺構の密度が異なる。柵列の内側（東側）には掘立柱建物が主軸を同じくして存在しているため、屋敷の内と外を区分する柵列だったのではないだろうか。

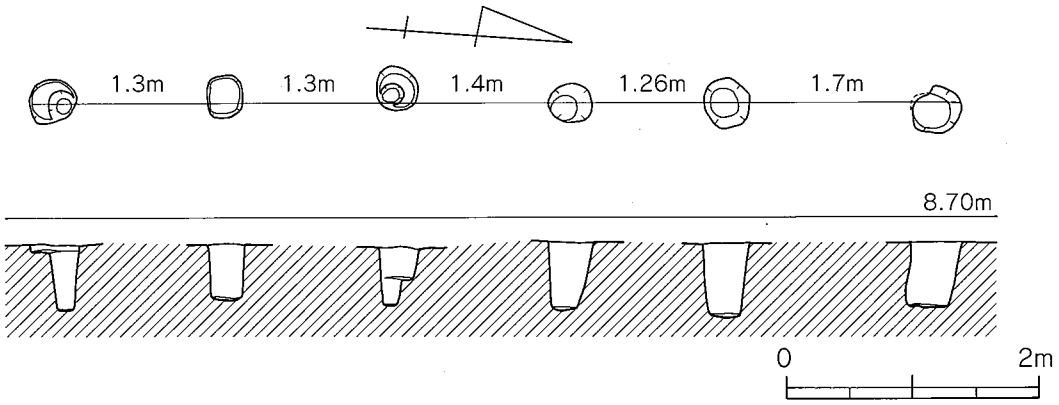
遺物は図化できる遺物はなかったが土師質土器の破片が混入しており、時期は14～15世紀頃と捉えられる。

（5）その他の遺構

調査区からは多くのピットが検出しており、その多くは調査区東側に集中する。調査区は湧水点が高く、そのほとんどが掘削後２～３時間で水が溜まる状況で地盤も軟らかいところが多い。そのため有機質の遺物が残りやすく、202号、201号柱穴では柱材が確認されている（第10図）。202号柱穴の柱材は先端部分が杭状に削がれており上部は断面長方形に面取りされている。ある程度埋めた段階で打ち込まれた状況を示している。

軟弱な地盤に対応するため、柱穴の中には礎石を有するもの、裏込石で柱を固定したもの、乾燥の目的か、柱穴を焼きしめ埋土には焼土や炭を意図的に入れたものなどが見られる（第11図－４～８）。この礎石や裏込石は表面を良く焼いてあり、赤変しているものやススが付着しているものが多く見られる。特に柱と接する部分が良く焼けており、柱材の腐食防止を目的とした可能性も考えられる。

その他、土師皿や高麗青磁などを半裁して祭祀行為を行っている柱穴も数カ所で確認された（第11図１～３）。１は、土師皿が置かれた位置が柱穴の中央に位置することから、建て替えに伴って柱を抜き取った際の祭祀行為と捉えうる。２、３の土師皿と高麗青磁碗は、柱穴の中央から逸れた位置から出土しており、柱を建てる際に地鎮の意味をこめて埋置したものではないかと思われる。



第９図　柵列状遺構実測図（1/60）

高麗青磁は口縁部を上に向け欠損した部分を柱中央部分に向け、見込み部分を柱側に傾けるような角度で据えている。柱穴やその周辺からも青磁碗の破片が検出されていないことから、別の場所であらかじめ半裁後、埋置したものと捉えられる。

また、136号柱穴からは、半裁した土師皿（第12図－２）と砥石（第12図－13）の他に埋土から焼土や炭に混ざって多くの炭化米が出土している。

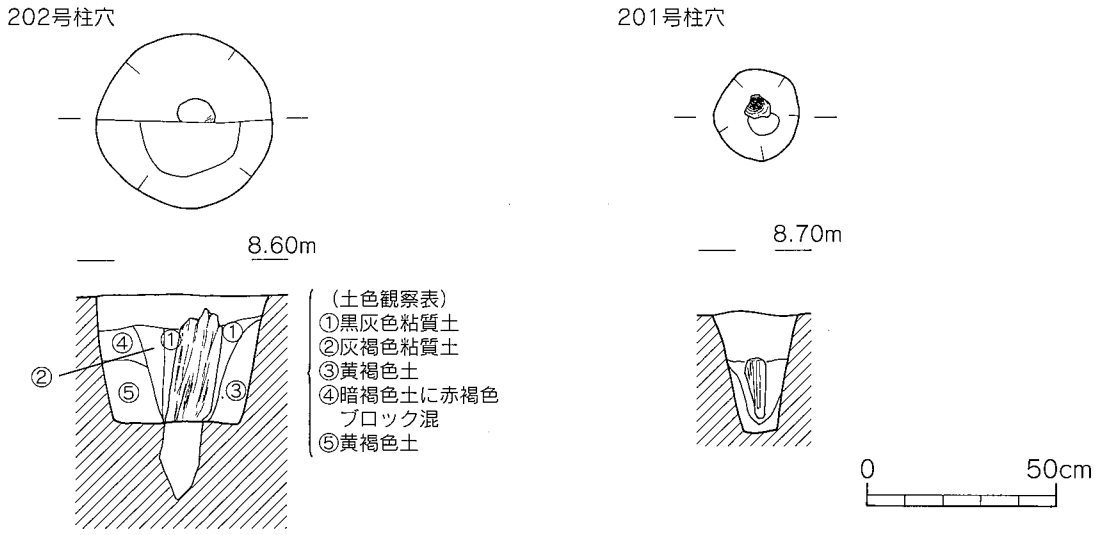
出土遺物（図版７、第11図）

遺物はすべてピットから出土した遺物である。１は45号柱穴から出土した高麗青磁碗で、復元口径12.4cm、器高4.1cm、高台径5.4cmでほぼ半分が欠損している。暗緑色の釉が内外面、高台部分まで丁寧に施されている。一部口縁部に釉だれがみられる。見込み部分には４つの雲文と円文の白象嵌文様が残り、外面には２条の沈線が巡る。口径に比べ高さが低い器形で円文、雲文などの象嵌が施されている点など15世紀代の高麗青磁の特徴が見られる。高麗青磁は11世紀から出土する朝鮮半島製の磁器で、輸出用に大量に製作されていた中国陶磁器に比べその出土率は極めて少なく、出土地の多くは大宰府、博多など中央政府の直轄地でかつ朝鮮半島に近い地域である。15世紀に入ると九州以外でも出土するが、鎌倉や一乗谷朝倉氏居館などの大都市や有力勢力地に集中している。前原市内ではこれが８点目の出土例で海岸部の遺跡から集中して出土する傾向がある。当時糸島一帯を治めていた原田氏の対外交渉を知る上で貴重な資料であろう。

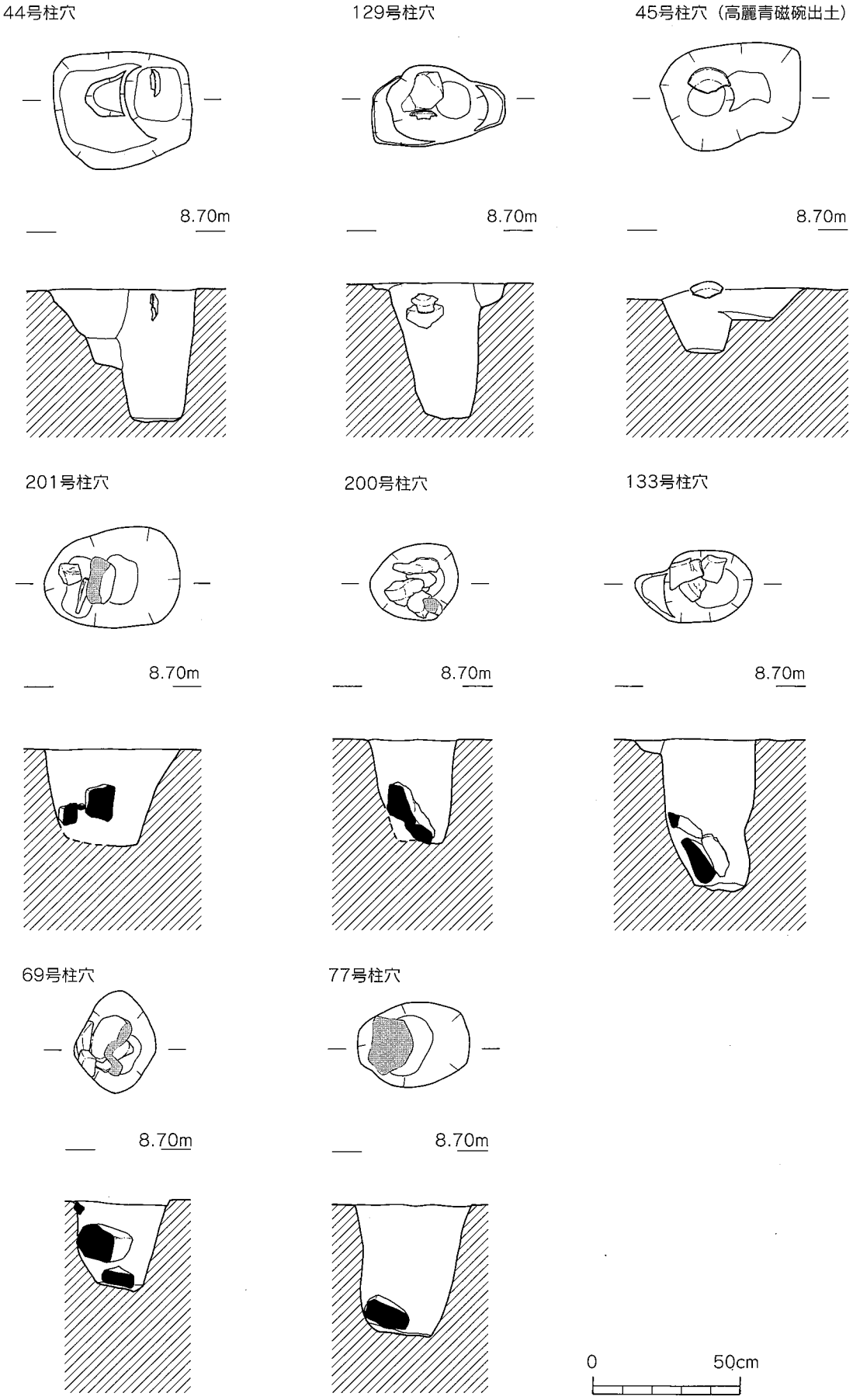
２～11は土師質の皿である。すべて回転糸切りの底部をもつ。２は底径9.0cm、136号ピット出土。３は口径9.7cm、器高1.8cm、底径7.8cm、133号ピット出土。４は口径13.4cm、器高2.3cm、復元底径10.2cm、５は口径12.7cm、器高2.2cm、底径9.7cm、10号ピット出土。６は口径13.0cm、器高3.1cm、底径8.2cm、131号ピット出土。７は復元口径9.6cm、器高1.8cm、底径6.9cm、44号ピット出土。８は復元口径9.4cm、器高2.1cm、底径7.0cm、115号ピット出土。９は復元口径9.3cm、器高1.3cm、底径8.8cm、30号ピット出土。10は復元口径8.3cm、器高1.3cm、底径6.4cm、27号ピット出土。11は復元口径7.5cm、器高1.9cm、底径5.0cm、14号ピット出土。

12は瓦器で、復元高台径6.2cm。外面に横方向の暗文が見られる。56号ピット出土。

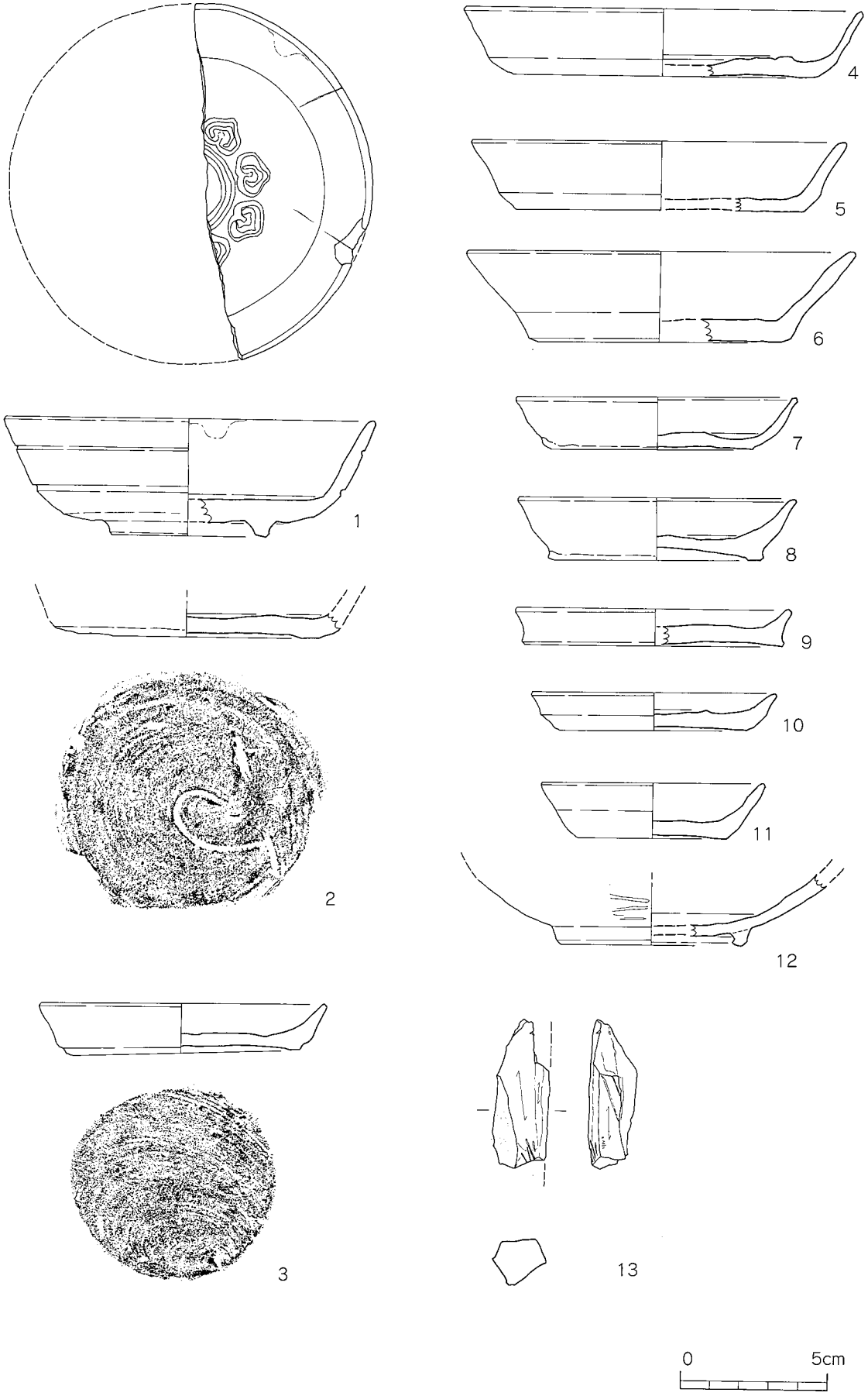
13は粘板岩製の仕上げ砥石で、残存長5.1cm、幅1.9cm、136号ピット出土。



第10図　柱材が残る柱穴実測図（1/20）



第11図　柱穴実測図（1/20）



第12図　柱穴出土遺物実測図（1/3）

Ⅲ．まとめ

発掘調査の結果、堀を伴う方形を呈する居館の一部を検出した。遺構としては堀、掘立柱建物、柵列、多数の柱穴群を検出し、遺物としては土師皿の他に、貿易陶磁器（中国陶磁器、高麗青磁）等出土している。なかでも、高麗陶磁器の出土はこの遺構の特殊性を示唆する。以下、各項目についてまとめてみたい。

１．遺構について

池田井田遺跡の発掘調査の結果、堀、掘立柱建物、柵列、多数の柱穴群を検出した。

調査区で検出された東西、南北方向に走る堀は居館を囲む堀の一部と考えられ、検出全長約30m、幅約4.5mを測り、断面形状は逆台形を呈する。堀は東西から南北方向へとほぼ直角に屈曲していることから、居館のちょうど北西コーナー部分と推定される。堀の内部の埋土から、常時水が溜まっていた様子が伺われ、水堀であったことがわかる。また、堀と柱穴の中から15世紀代の土師皿と貿易陶磁器が出土していることから、15世紀代の遺構と考えられる。

ところで、当該遺跡の南西部に隣接する産宮神社との間は現在南北方向に走る道路になっているが、踏査及び聞き取り調査の結果、かつては堀状の溝が南北方向に走っており、それを埋めて道路にしたことを確認している。また、産宮神社の南側にも堀状の溝が東西方向に走り、神社境内端部には土塁状の高まりが残っていたという情報を得ている。これらのこともふまえると、当該遺跡一帯には複数の郭で形成された居館が所在したと考えられ、当該遺跡はその一部であったと推定される。

なお、今回の調査区は居館の北西コーナー部分であったために、居館内部についての情報はあまり得られなかった。しかし、コーナー部分であっても柱穴内部に柱の沈下を防ぐための礎石を設置するなど当該地の土質に適合した基礎工事を十分に実施した後に掘立柱建物、柵列等を構築していることから、中心の主殿部分等は当該地よりさらに丁寧な基礎工事を実施し、建物等が構築されていたことも想定される。今後、新たな資料の蓄積とその解明が待たれる。

２．遺物について

発掘調査の結果、遺物としては土師皿の他に、貿易陶磁器（中国陶磁器、高麗青磁）等も出土している。なかでも、高麗陶磁は11世紀から大宰府・博多に集中して出土するが、13世紀まで貿易を目的として製作されていないため中国の陶磁器に比べてその出土量が極めて少ないのが特徴となっている。15世紀に入ると、九州以外でも出土が見られるが、それでも鎌倉や一乗谷などの大都市や有力勢力の居館などに集中する傾向にある。この項では池田井田遺跡から出土した高麗陶磁についてまとめてみたい。

今回池田井田遺跡から出土した高麗青磁碗（第12図-１、図版７-１）は復元直径12.4cm、高さ4.1cm、底部径（高台形）5.4cmを測り、見込み部分に円文、雲文の白象嵌文様を持ち、森田編年では15世紀代の時期が与えられる。[注1] この他に高麗陶磁は前原市内において志登遺跡、上町木下遺跡、潤地頭給遺跡、三雲遺跡などから出土しているが、合計しても10点にも満たない。そこで当該遺跡から出土した高麗青磁碗を含めて整理すると、以下の共通点を見出せる。①遺物は、周溝を巡らす居館跡もしくはそれに関連する墳墓などから出土していることが多い。②遺跡の立地条件として、沿岸部に所在することが多い。以上の２点から、高麗陶磁はその貴重さの故、糸島地方では、沿岸

部に拠点を置き水上交通の要衝を支配していた原田氏から恩賞として賜ったものと考えられる。

３．総括

池田井田遺跡から検出された居館が造営された15世紀は都で応仁の乱（1467年）が勃発し、余波が各地方に波及する。その結果、室町幕府の権威は失墜し、戦国の世を迎えることになる。糸島地方も大内氏の家臣であった原田氏（拠城は高祖城）と大友氏の家臣の臼木氏（拠城は柑子岳城）とで糸島地方の覇権をめぐり再三合戦が行われる。応仁の乱は室町幕府の権威失墜をまねいたのみならず、権力の空洞化をもたらした。その幕府の空白の虚をついて、かつて強力な守護大名の支配下にあった西日本各地の中小領主などが自己勢力の拡大を求めて独自に対外交易を行ったと考えられる。[注2] 原田氏もその例にもれず、「絲州太守」として『海東諸国紀』には「大蔵氏道京（原田種親）」の名がみられ、応仁２年（1468）と翌文明元年（1469）の２年間に宗氏の仲介で朝鮮に使者を派遣していたようである。糸島半島は遣唐使などの寄港地となっており、古くから良港を擁する対外交渉の要衝であった。原田氏は地の利を活かし、独自で船団を編成し、その後も朝鮮半島・中国大陸と交易し、高麗青磁・中国の陶磁器など輸入したと考えられる。

ところで、池田井田遺跡から検出された居館の主はどのような人物であったのであろうか。原田氏の家臣であることは間違いないとは思われるが、当該遺跡の近隣に伝波多江丹波守屋敷跡が所在することから、原田氏の家臣団のなかでも波多江氏に関連する一族の居館であった可能性が高いと考える。なかでも波多江氏の一族であり、地名の由来にもなった池田氏が最有力候補と思われ、検出された居館は『原田35代系図』（安永７年２月）に「波多江家は原田治朗大宰大監種賢の二男、波多江掃部介種俊より相続して、怡土郡池田村、志摩郡波多江村を居城とす」と記された「池田城」の一部である可能性も考えられよう。[注3]

最後に、今回の調査で出土した高麗青磁碗は居館の主が何らかの軍功（手柄）を挙げた時に主家である有力勢力層のみ入手できたであろう。それを建物の建て替える際の祭祀行為として意図的に一部欠損させて柱跡に埋納したと考えられる。

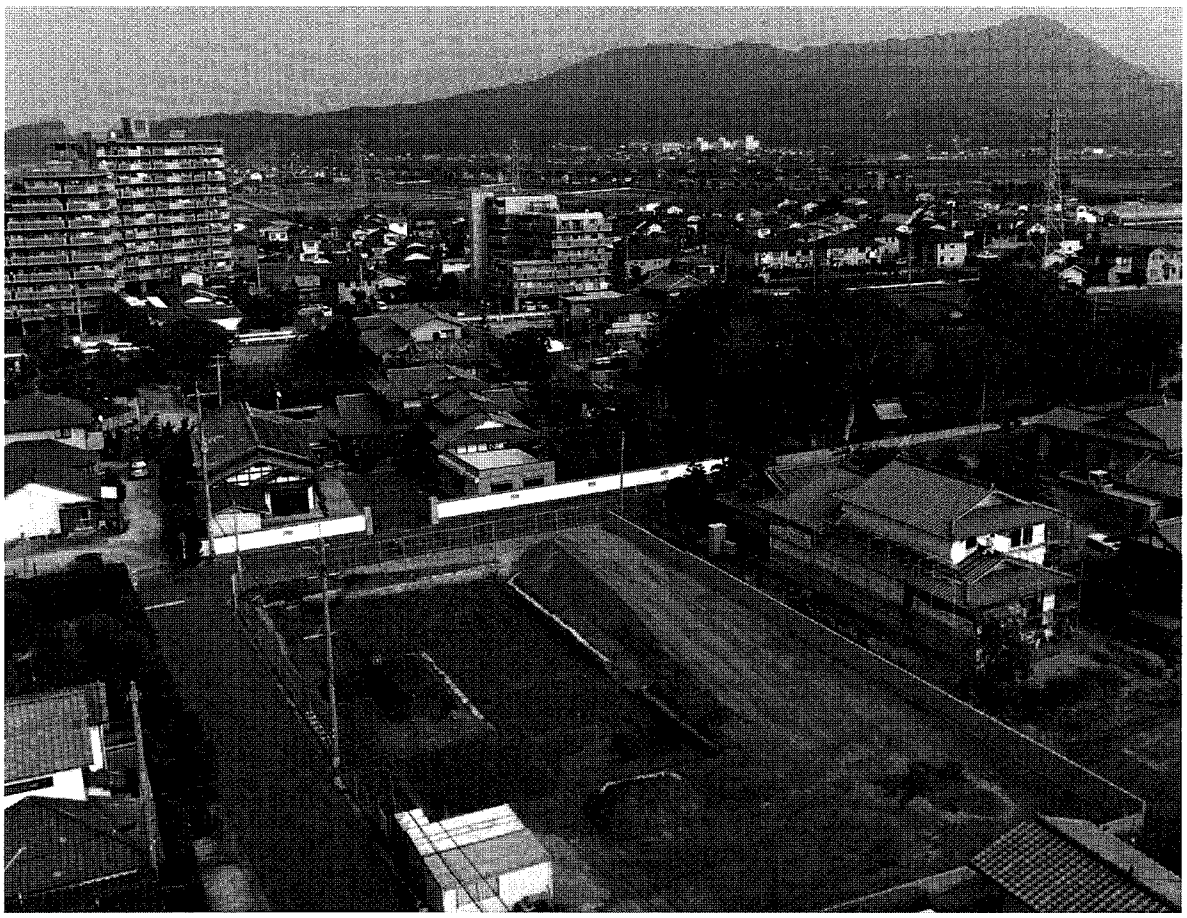
〈参考文献〉

１．森田　勉「北部九州出土の高麗陶磁器―編年試案―」（『貿易陶磁研究』No.５・日本貿易陶磁研究会・1985年）

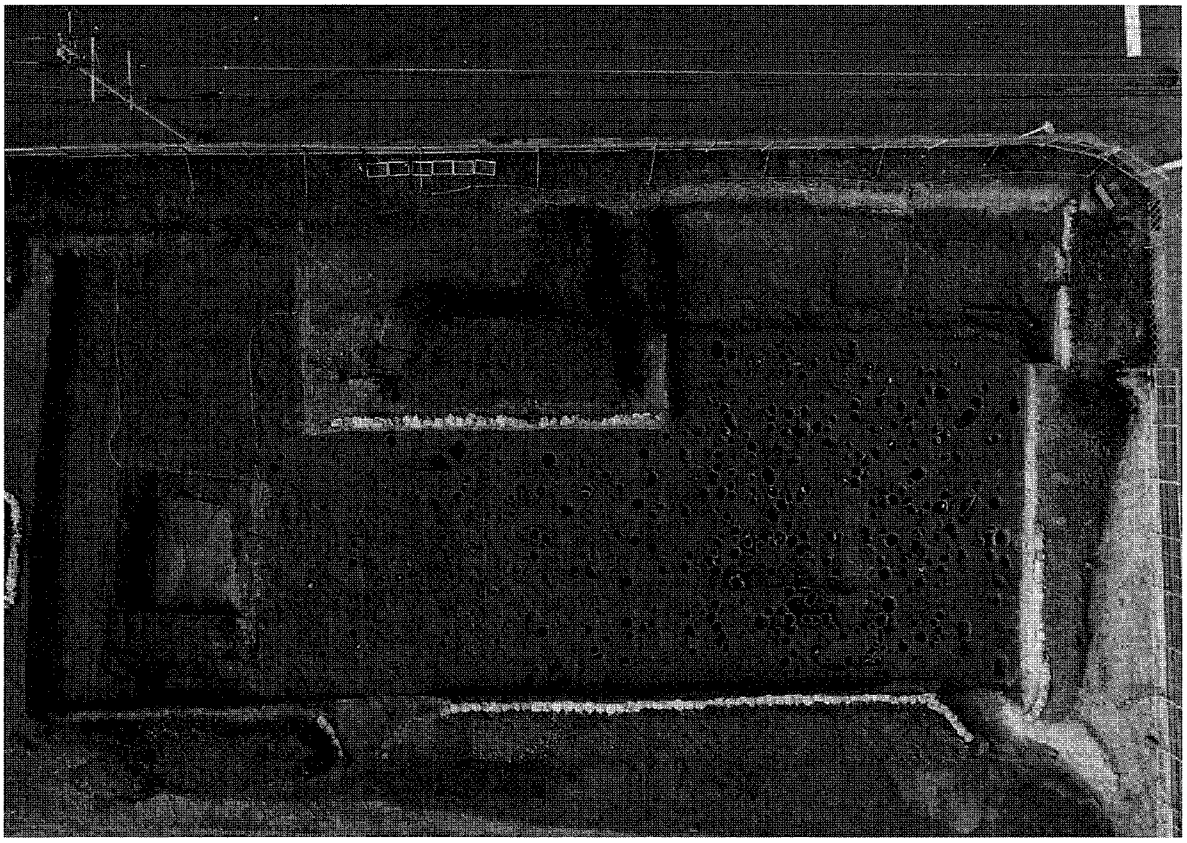
２．田中健夫『中世対外関係史』(1975年)186頁～187頁

３．丸山雍成氏より御教示賜った。

写 真 図 版

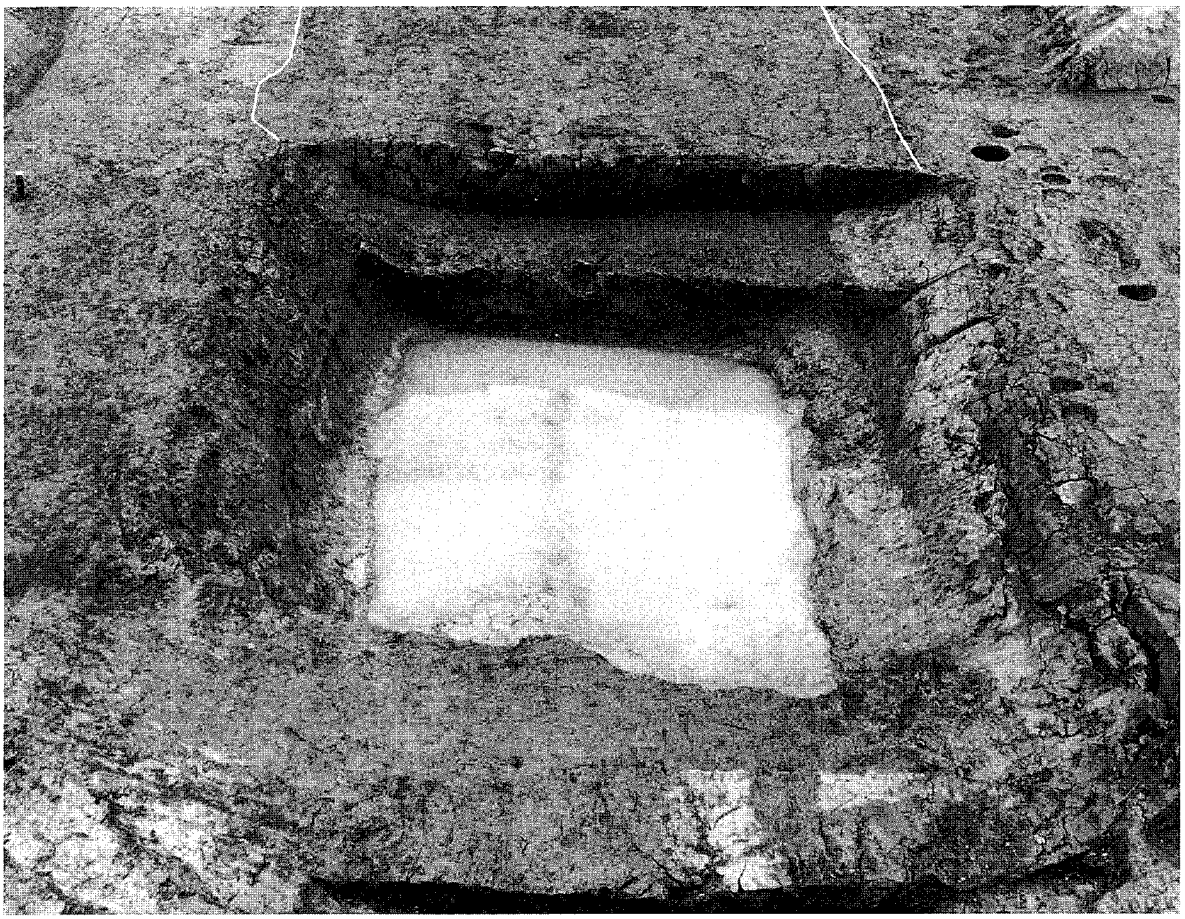


1．池田井田遺跡から産宮神社をのぞむ（南西から）

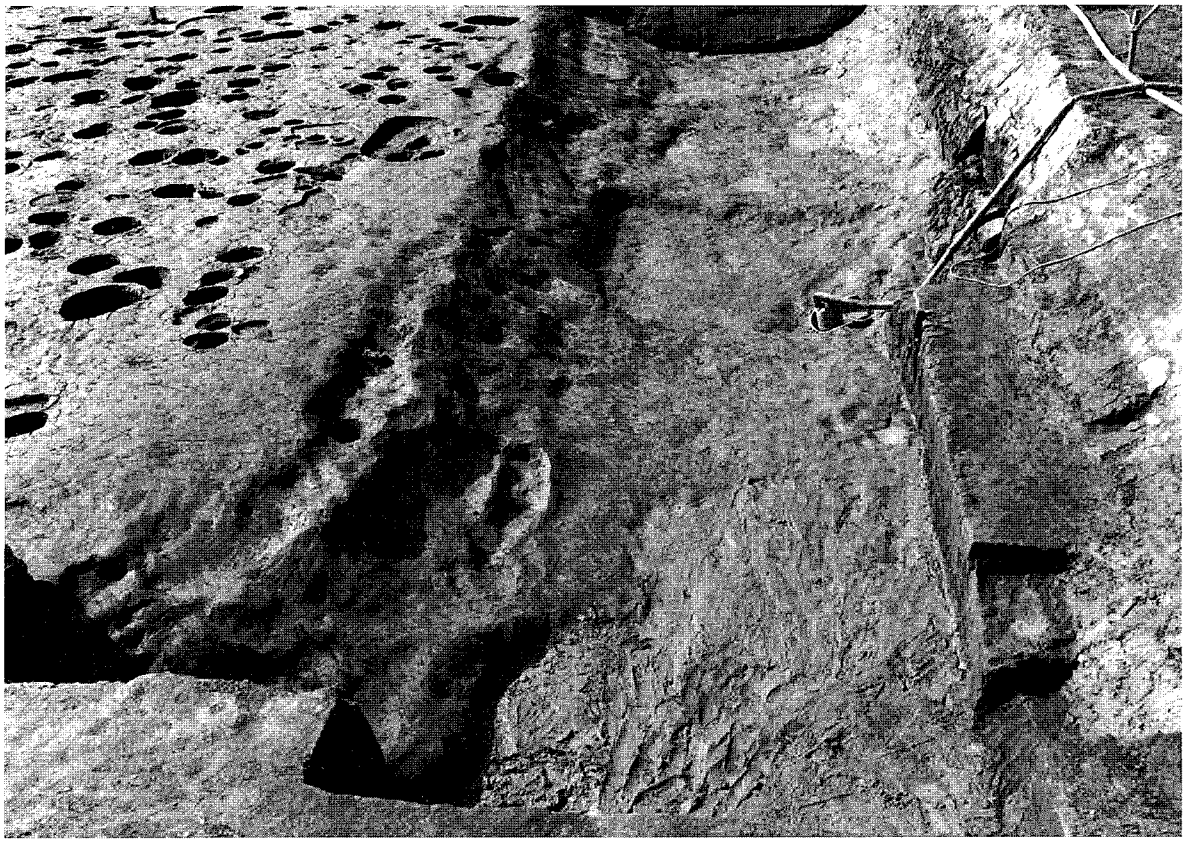


2．池田井田遺跡（真上から）

図版２

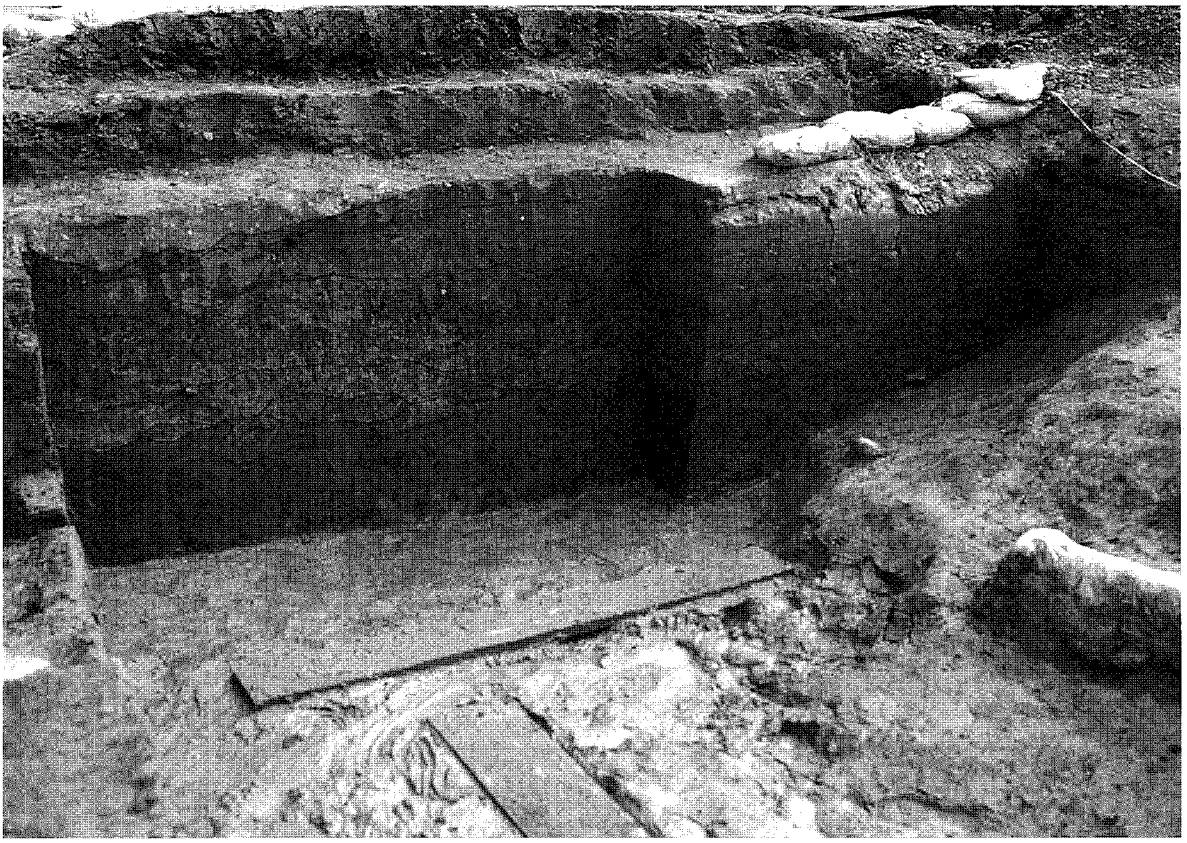


１．1号溝（南北方向、南から）



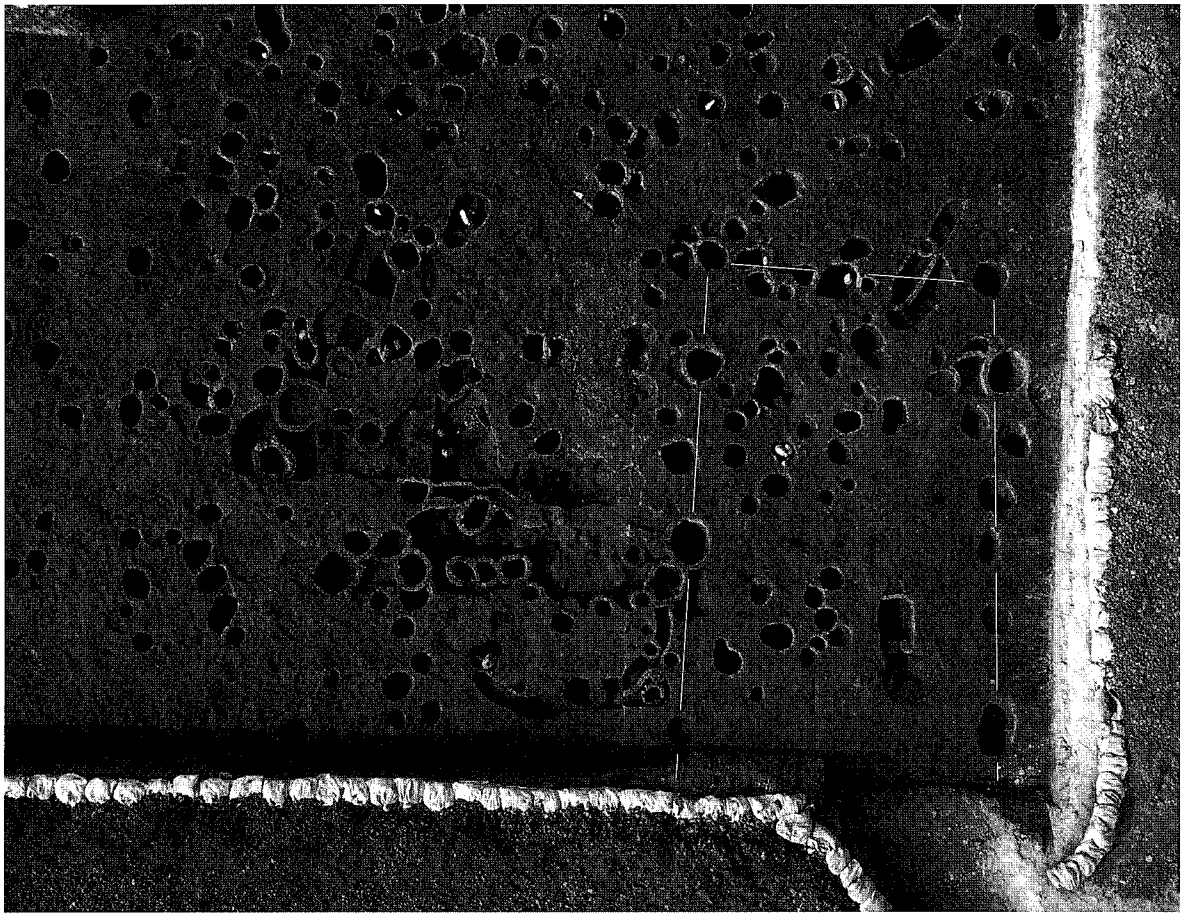
２．1号溝（東西方向、東から）

１．南北方向1号溝土層断面（南壁面）

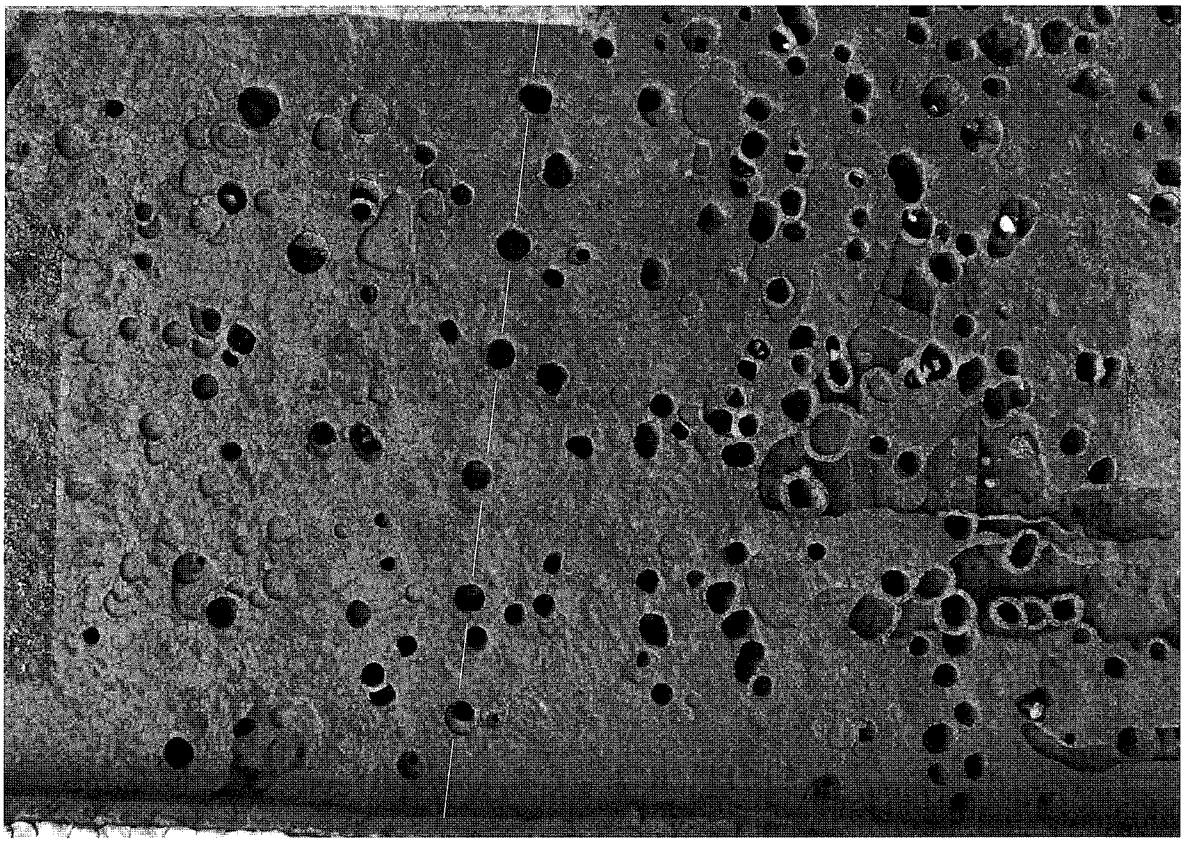


２．東西方向1号溝土層断面（東壁面）

図版４

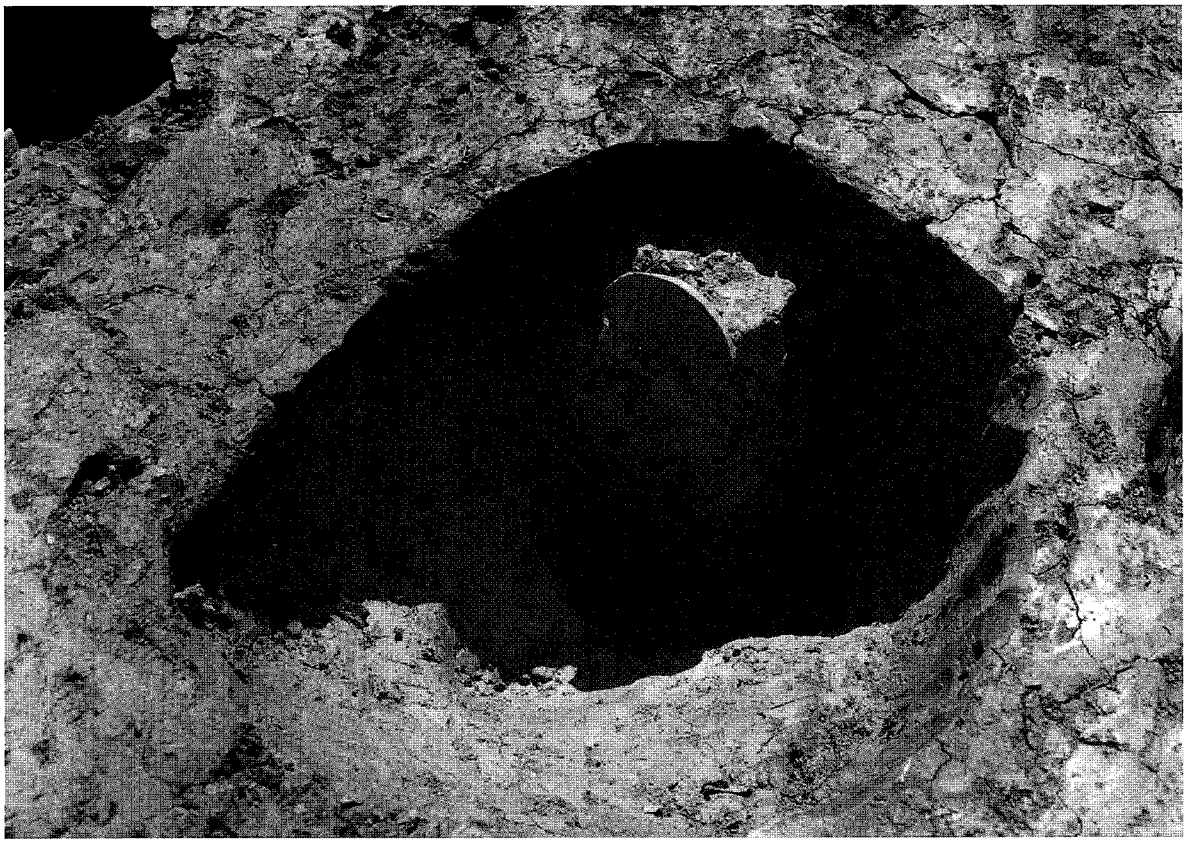


１．1号掘立柱建物（南から）



２．柵列状遺構（真上から）

１．45号柱穴高麗青磁碗出土状況（南から）

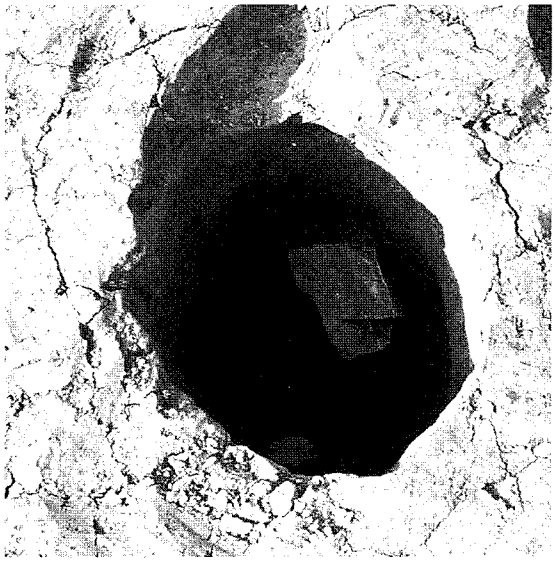


２．44号柱穴土師皿出土状況（東から）

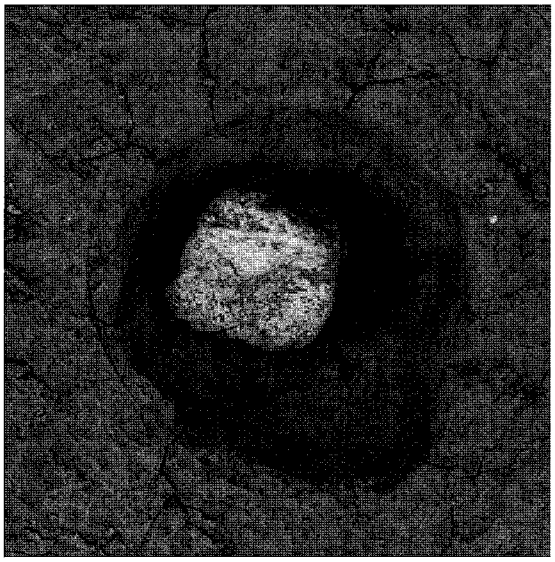
図版6

1．**裏込石**（77号柱穴）

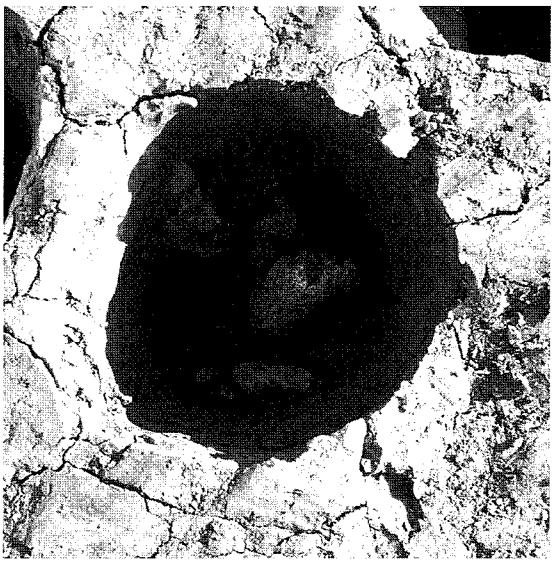
4．**裏込石**（203号柱穴）



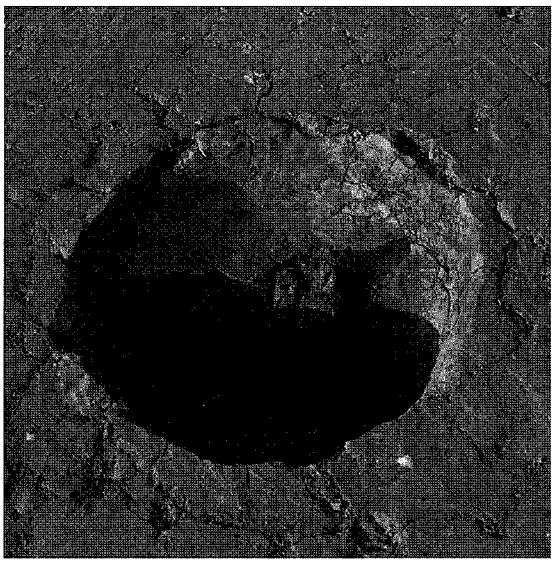
2．**裏込石**（133号柱穴）



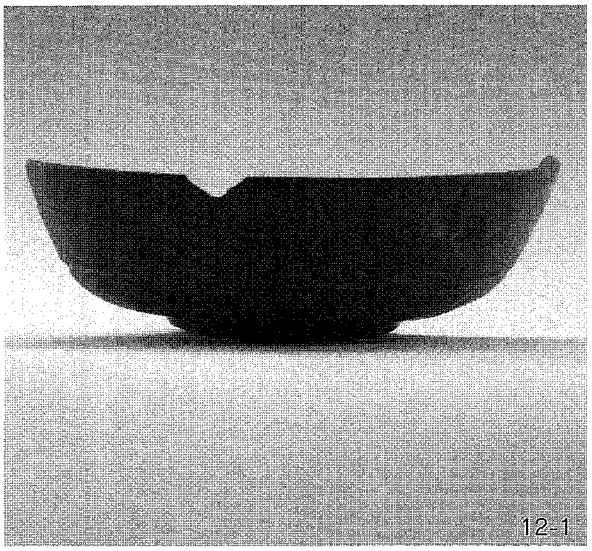
5．**裏込石**（204号柱穴）

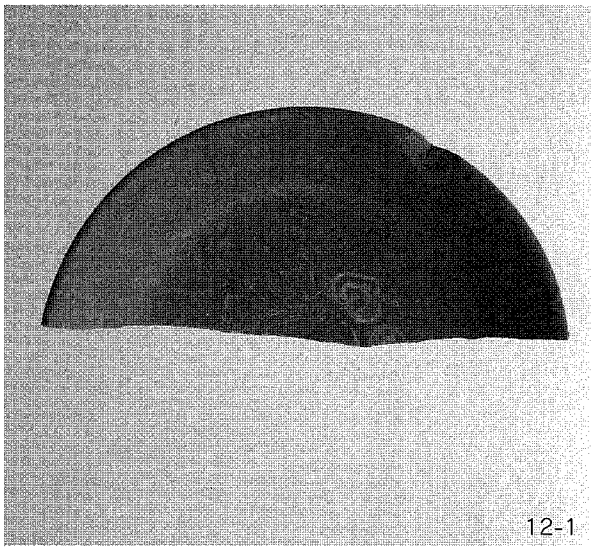


3．**裏込石**（23号柱穴）

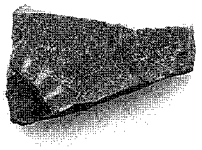


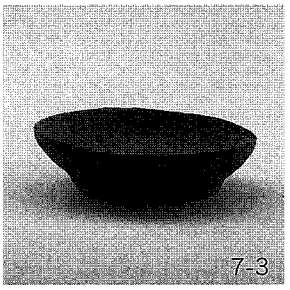
6．**柱材出土状況**（202号柱穴）

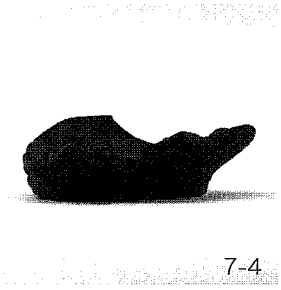


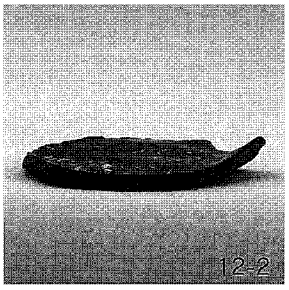


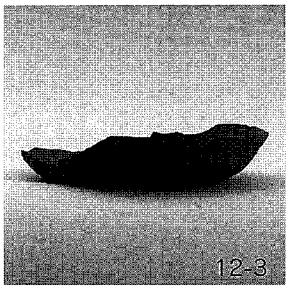
１．高麗青磁

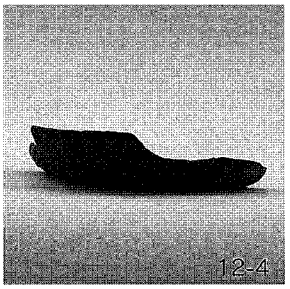


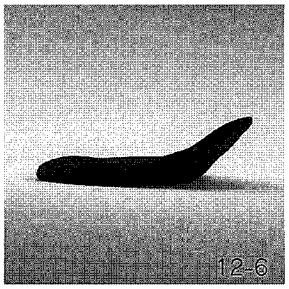


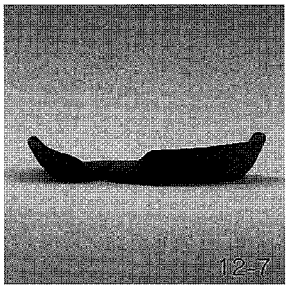


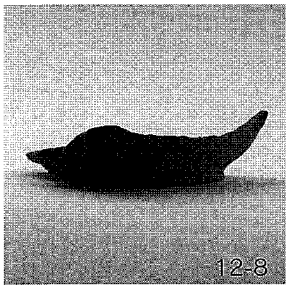


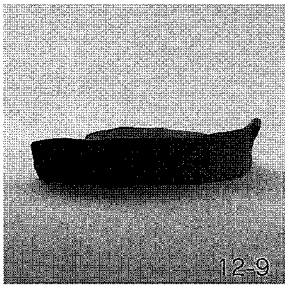


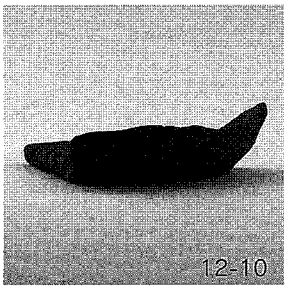


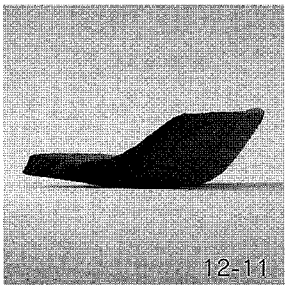


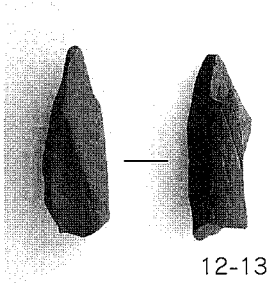












２．出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけだいたいせき
書名	池田井田遺跡
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	前原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第91集
著者名	瓜生秀文・脇谷華代子
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1117福岡県前原市前原西一丁目８番14号
発行年月日	西暦2006年３月31日
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕　前原市教育委員会
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
池田井田遺跡	福岡県前原市波多江駅南一丁目707-8、10	40222		33°33′50″	130°12′00″	2005.9.20～11.18	450㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池田井田遺跡	集落、居館跡	室町時代～戦国時代	掘立柱建物、柵列状遺構、溝（堀）、ピット	高麗青磁碗、中国製輸入陶磁器、土師質土器、土師皿、灯明皿、砥石、礎石、炭化米	

池田井田遺跡

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

前原市波多江駅南一丁目所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書　第91集

2006年3月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目８番14号
TEL 092-323-1111

印　刷　株式会社　重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目１番８号
TEL 092-322-0191　FAX 092-324-2661